

著書（共著）紹介

## 『中世ヨーロッパを生きる』（甚野尚志・堀越宏一編）

東京大学出版会 二〇〇四年二月二〇日刊、三二二頁、二八〇〇円＋税

遠山 茂樹

本書は中世ヨーロッパを扱った歴史書とはいえ、いわゆる西欧中世史の概説書ではない。さりとて、個々の研究者の専門論文をあつめて編まれた純然たる学術書とも性格を異にする。

本書は、ひとつの―あくまでも「ひとつの」である―西欧中世史入門ではあるが、一般読者をも視野に入れている点に大きな特徴があり、扱われているテーマも多岐に及んでいる。「あとがき」において編者が述べている文言を借用すれば、本書は「いまだ地図なき世界に」―一名の執筆者が一步をしるした、「生活と環境の歴史学」の書というところになるが、いわゆる理論武装で身を固めた固陋な書物でないことは、表紙カバーを飾って

いる図版（一三三〇年代後半にアンブロージオ・ロレンツェッティが描いたシエナ郊外の田園風景）を目にしただけでも、容易に推測がつくであろう。

さて、本書全体をつらぬいている視角は、大きくいつてふたつある。ひとつは、中世に生きた人びとの生活世界を文化的に読みとく視角であり、もうひとつは、人びとの生活と自然環境との相互作用をさぐる環境論的な視角である。これらふたつの視角は、けっして異なる方向に向かうベクトルではなく、ケルトの組紐文様よろしく、たがいに密接に絡みあつて中世世界に生きた人びとのタピストリーを編んでいるといふべきであろう。

本書には、中世ヨーロッパの生活と環境にかかわる

一五の論考がおさめられているが、それぞれの論考は独立性が強く、それゆえにどこから読み始めてもさしつかえない体裁をとっている。各々の論考を仔細に紹介することは、筆者（遠山）ひとりの手にあまるが、それを重々承知の上で、あえて以下に簡単な紹介をおこなってみた。

本書の構成は、次の通りである。

## 目次

中世の扉を開けよう！

甚野 尚志

堀越 宏一

## I 自然と人間

中世アイリッシュ海風雲録

有光 秀行

アルピオンの森林史話

遠山 茂樹

水車は領主のものか？—ひとつの公共性の誕生

堀越 宏一

災害を前にした人間

甚野 尚志

## II 日常生活の作法

衣服の色と文様が語る中世フランスの感性

—フィリップ・ル・ボンの涙模様の黒い帽子

をめぐって

徳井 淑子

フオーク誕生の秘密

池上 俊一

騎士の住む城、暖炉のある農家

堀越 宏一

## III 人びとの絆

母とこども

高橋 友子

「老いと病い」を生きる

河原 温

遺言にみる中世人の世界—ジェノヴァの事

例から

亀長 洋子

職人兄弟団—宗教がとりもった仲間たち

佐久間弘展

## IV 出会いのかたち

楽師伝説—人びとと音楽をつなぐもの

上尾 信也

書簡とコミュニケーション

基野 尚志

巡礼と観光―「余暇社会学」序説

関 哲行

写本絵画の物語叙述とコンテクスト―斬新な聖人伝

挿絵サイクルの成立をめぐる

前川久美子

あとがき

執筆者紹介

本書の前書き部分にあたる「中世の扉を開けよう!」において、編者は本書の見取り図を示している。なかでも多様化する現在のヨーロッパ史研究のなかで、いま何が脚光を浴びているのか、また、中世ヨーロッパの生活世界を読みとくことが、なぜわれわれの関心となっているのか、といった大きな問いを発しながら、本書の目指すところを詳述している。ここには現在の歴史学の潮流が示されており、とりわけ文化的なそれは一読に値しよう。

.....

前述のように、本書の大きな柱のひとつは、西欧中世

人の生活世界を文化的に読みとく視角であるが、それはとくに服飾や食文化、あるいは住空間を扱っている第二部に顕著にあらわれている。それゆえ、本書紹介の扉も第二部から「ひとつひとつ開けていくことにしよう。」

徳井淑子「衣服の色と文様が語る中世フランスの感性―フリリップ・ル・ボンの涙模様の黒い帽子をめぐる」は、一五世紀という時代に、フランスでなぜ涙模様が流行したのか、黒という色の流行と合わせて解き明かし、時代の感性を鋭く読みといている。著者は年代記作者ジュールジュ・シャトランが記しているブルゴーニュ公フリリップ・ル・ボン（一三九六―一四六七年）の服装の様相に着目し、黒いビロードの帽子に付けられた涙模様の背景には、武芸試合における当該模様の流行が考えられること、さらに、涙模様には個人的な感情から文学的叙情性までが込められていたこと、端的にいえば、それには一五世紀の宮廷文化が凝縮されていると説く。

黒い服は一三五〇年代のイタリアで流行しはじめ、八〇年代にはフランスの宮廷に受け入れられ、一五世紀には市民の間にも定着したという。もともと中世にあつて

は、黒は決して美しい色ではなく、黒い服が晴れ着になることもなかった。それがフィリップの時代に漆黑に染める技術が開発され、黒色の価値が大きく変化する。人びとは、黒色に美的価値を見出すようになるのである。

色彩の社会的な意味のみならず、その象徴的な記号をも読みといているこの論者は、ひろく画像学から文学論をもカバーしており、感性の歴史としての服飾史を知る格好の作品となっている。

池上俊一「フォーク誕生の秘密」は、フィレンツェの富裕市民フランコ・サツケッティが一四世紀末にまとめた『三百小話』をもとに、食の風景を活写している。当時のテーブルアートに関する説明もさることながら、随所にもりこまれた食にまつわるエピソードも面白い。たとえば、かのモンテーニュがイタリア旅行をした際に、スプーンを出されたが、彼自身は手づかみで食べて、汚れた手をその都度きれいなナプキンでぬぐうほうが上品だと考えていたという。一六世紀のフランスは、食文化においてもイタリアに後塵を拝していたのだ。

フランスではかのルイ一四世（在位、一六四三〜

一七一五年）の宮廷においてさえ、フォークは使われていなかったというし、その後継者であったルイ一五世ですら、いまだ「手食」だったというから驚きだ。フランスばかりではない。ヨーロッパの他の諸国も、一七〜一八世紀においても手食の習慣を固守し、フォーク導入に頑なに抵抗していた。

イタリアにおいてフォークが普及した背景には、 Pastaが食事システムにとり入れられたという事情があった。一七世紀における乾燥パスタの普及とともに、フォークも南から北へと北上し、イタリア半島全域にひろまっていたのである。それと同時に注目されるのが、食器の個人化である。フォークにせよ、スプーンにせよ、個人用食器の出現もまたイタリアが最初だった。学識豊かな著者は、そうした食器の個人化現象の背後に、一五世紀イタリアに花開いたユマニスムの精神を見抜いている。

堀越宏一「騎士の住む城、暖炉のある農家」は、諸侯の城、農民戦士の館、さらには農民の住居をとりあげながら、その建築素材や内部構造、あるいは形状や社会的意味合いの変化を社会構造の変化と関連づけながら説き

明かしている。

著者によれば、城主たちは裁判をおこなうことによつて農民を法的に支配する一方、他方で近隣の有力者を主君とおおぐ封建家臣となり、それによつて城の保有を安堵してもらつた。この二つの関係こそ、中世ヨーロッパ封建社会の基礎を成す、裁判権による領主の農民支配と封建的主従関係にはかならない。城は領主の住居であると同時に、「支配の核」でもあつた。そうした観点から、著者は城の公的空間としての「広間」に注目し、その重要性を指摘している。中世の城といえ、とかくその軍事的な機能のみが強調されがちだが、実際には、司法・行政的な機能も兼ねそなえていた。「広間」は、その象徴的空間でもあつたのだ。

農民戦士の館では、フランスのコルティール遺跡にみられる一一世紀初頭の館が図解入りで紹介されているが、この遺跡は城としての特徴と農家としての特徴をあわせもっている。こうした農民戦士の住居例はめずらしく、その紹介したい、きわめて貴重なものといえる。さらに農民たちの住まいに関しては、農村社会の変貌や農

家のあり方の多様化について触れ、暖炉の構造やその社会的な意味について言及している。著者の中世考古学に對する造詣の深さが、行間からも伝わってくる。

.....

ところで、現代人と同様、中世に生きた人々にとつても、結婚や出産、親子関係、病氣、老いと死は大きな問題であつた。続く第三部では、そうした問題を中世の人々がどのように受けとめていたのか、また人々の絆はどのようなものであつたのか、その具体的な姿かたちが大きなテーマとなつている。

高橋友子「母と子ども」は、一四〇一五世紀のイタリア社会にみる親子関係、特に母親と子どもとの関係を、一五世紀半ばにフイレンツェに開設されたサンタ・マリア・デリ・インノチエンティ捨児養育院の記録などを手がかりにさぐつてゐる。当時の人口動態、社会階層の構成、里子制度、さらには捨児や孤児をめぐる状況にまで目を向け、子どもに對する親の愛情についても触れている。

この時代のイタリアの都市では、必ずしも母親が子ども

もに授乳していたわけではなく、乳母に育てられたり、農村に里子に出されたりしていたという。フィレンツェでは、上層市民の女性は子育てに煩わされることなく、速やかに健康を回復し、次の出産にそなえるために、子どもは母親のもとから離された。中下層の市民のあいだでは、母親がただちに仕事に復帰できるようにするため、子どもを農村に里子だすことが多かった。早すぎる母と子の別れがそこにはあった。

また、当時の養育院は現代でいえば保育所のような役割もはたしていたが、そこに入所した子ども七割が死亡という。子どもの死亡率が高かったうえに、当時は親と子が一緒に生きる期間も短かった。さればこそ、「一般的には母親はこどもに深い愛情を抱き、社会もまた母親の母性愛を自然な情愛とみなしていた」のである。著者の新刊『路地裏のルネサンス』（中公新書、二〇〇四年）を併読すると、より一層理解が深まる。

河原 温 「老いと病い」を生きた「ブルツヘ」(ブリュージュ)の聖ヨハネ施療院ならびにフィレンツェのサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院をとりあげながら、西

欧中世社会における「老いと病い」の問題を論じている。現代英語で「病院」を意味するホスピタル (hospital) のルーツは中世の施療院にあるが、そもそも中世の施療院は旅人を歓待し、宿泊させる「施設」に由来し、近代的な意味での医療行為は施されなかった。施療院は、当初、肉体の問題というよりも、むしろ死後の世界における救済を求めた人びとの霊的救済を保証する施設として存在していたのである。したがって、中世の施療院は、ある意味で近代的な意味での病院以上に修道院としての性格をもっていたという。そうした施療院は、いったいどのような社会的役割を担っていたのか。中世・ルネサンス都市社会史の第一人者である著者は、具体的かつ明快にそれを説明している。

後半部分では、ヨーロッパで最初の本格的な「病院」として有名なフィレンツェのサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院をとりあげ、西欧中世社会における「病い」への取り組みについて考察している。医療中心の「病院」施設の進展は、一六世紀を画期として、「施療院」改革においてすすめられていくプロセスの一環をなしていたこと、

また都市の中産商工業者を中心とする病人の治療の特化は、公権力による社会政策の一環をなしていたともうけとれる、と著者はいう。

中世都市をも含めた広義の中世ヨーロッパの生活環境については、著者も（さらには本書の編著者である甚野尚志ならびに関 哲行の両氏も）執筆陣として加わっている『新書ヨーロッパ史 中世篇』（堀越孝一編、講談社現代新書、二〇〇三年）をひもとくと、より一層多くの知見を得ることができようであろう。

亀長洋子「遺言にみる中世人の世界―ジェノヴァの事例から」は、一四世紀半ばに活躍したジェノヴァ人の富豪ナポレオーネ・ロメッリーニの「最後の意志」（＝遺言）を手がかりに、死を目前にひかえた彼の心の軌跡をさぐり、中世ジェノヴァ人の死生観や家族観をみつめている。遺言書に書き記された品目は、当時の商品価値や、富裕貴族の女性の生活を興味深く伝えている。寡婦という地位は伝統的な女性区分のカテゴリーのひとつであったが、そうしたカテゴリーが中世後期のジェノヴァにおいても認識されていたことを著者は遺言から読み取り、詳説し

ている。それに関連して、ジェノヴァ人の遺贈として重要な役割を果たしていたのが公債であったという事実は、公債制度が発達した都市ジェノヴァならではのものとして興味深い。

また、子どもたちへの遺贈については、ナポレオーネが息子たちのあいだの「平等」を強く意識していたことが窺える。ひとつの遺言が明らかにするものは、救済観、家族観にとどまらず、日常生活や社会の経済システムにまで及ぶものであることを、この論考は実証の裏づけをもつて教えてくれる。

佐久間弘展「職人兄弟団―宗教がとりもつた仲間たち」は、中世後期に数多く設立された宗教的な兄弟団について、まとまった史料が残っているストラスブルク毛皮細工師職人の兄弟団規約をもとに、その日常的な活動をさぐっている。また、ハイルブロンやフライブルクの職人兄弟団を引き合いにだしながら、職人兄弟団が現世の社会経済的な利害を追求する自治的な組合としても機能していたことを明らかにしている。兄弟団が宗教的目的を実現するには、教会や修道院施設と契約する必要があつ

だが、初期の職人兄弟団にあつては、フランシスコ会やドミニコ会といった托鉢修道会が好まれた。宗教兄弟団は、同職の親方や女性を含んだり、複数の職種にまたがったりと、きわめて開放的な性格をもつていた。この点が商人ギルドや同職組合と異なるところで、興味をそそられる。

ペスト大流行を契機に職人たちは高賃金を求めて流動化し、遍歴が一般化する。こうした遍歴職人を迎え入れる必要から、職人たちはそれまであつた酒坊を発展解消して職人宿をもつようになるが、それらの職人宿は既存の宿屋・居酒屋にもうけられたのであつた。そして、そこで開催された集会や宴会を通じて、職人たちは遍歴のネットワーク、相互扶助のネットワークをつくりあげていったのである。何よりも、彼岸において魂の安寧が保証されることを願つた気持ちは、手工業に従事する職人として、変わりはない。その意味でも、職人兄弟団は、まさしく中世的な職人組織だったのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

続く第四部「出会いのかたち」では、人びとのコミュニ

ニケーションがテーマとなる。具体的には、楽師、書簡、巡礼、写本がとりあげられているが、重要なことは、それらは中世ヨーロッパに生きた人々の日常生活と深くかかわるものであつたということである。コミュニケーションをめぐる問題が近年の研究で関心をあつめているのも、おそらくそのためであろう。

上尾信也「楽師伝説―人びとと音楽をつなぐもの」は、有名なグリム兄弟の『ドイツ伝説集』や一三世紀の『ギョーム・ド・ドール』、あるいはフロワサールの年代記や実際の音楽作品を通じて、「楽師」たちにもつかわる伝説から、中世の人びとと音楽とのかかわりを考察している。中世の王侯貴族の宮廷では、ジョンブルやミンストレルと呼ばれる楽師たちが、詩歌を歌い演じ、舞踏の伴奏をし、さまざまな物語を語つていた。かれらの社会的出自はどのようなものであつたのか。また、かれらと民衆をつなぐものは何だつたのか。著者はマリア賛歌や奇蹟伝説の流布に大きな役割を演じていた楽師たちの重要性を指摘し、これまでに一般には<sup>テラ・インファンタ</sup>未踏の地<sup>テラ・インファンタ</sup>であつた分野にスポットライトをあて、知られざる中世世



界の一隅を照らし出している。

十字軍戦士としても名高いリチャード獅子心王は、みずからも宮廷歌人（北フランスではトルヴェール、南フランスではトルバドゥールと呼ばれた）として、「囚われ人は決して」という歌を残している。父王ヘンリからブランタジネット・ドミニオンを相続したこのイングランド王には、文芸の手厚い保護者だった母イリナ（アリエノール・ダキテーヌ）の、そしてさらにいえば曾祖父ギヨーム九世の血が流れていたというべきであろう。

ともあれ、著者の奏でる学的旋律は、音楽、文学、美術、歴史学といった近代的な学問の垣根をいとも軽妙に飛び越えている感がある。

甚野尚志「書簡とコミュニケーション」は、古代ローマで開花した西欧の書簡文化を、中世の歴史的文脈のなかで跡づけている。一二世紀にみられた友情の書簡の流行は、キケロをはじめとするラテン語古典の秀逸さが再発見された「一二世紀ルネサンス」（チャールズ・ホーマー・ハスキンス）に付随する現象であった。シトー会などの改革派修道院による牧羊業の発展は羊皮紙の大量

生産を促し、それによって書簡作成も容易になったという興味深い指摘もみうけられる。

一二世紀には書簡作成術として知られる学問が成立し、司教座付属学校には書簡作成教師と呼ばれる教師も出現する。当時は文書による統治技術が浸透しはじめた時代で、書簡作成術も国王や諸侯あるいは都市の書記局でとくに必要とされた技術なのであった。教会史はいうに及ばず、古典や政治理論にも通暁している著者は、ひろい歴史的パースペクティヴで書簡文化の成立を説きおこしている。

また、書簡からみた中世の学生生活も興味深い。中世ヨーロッパの学生が、書簡のなかで両親に訴えていることは何か。逆に、親がこどもに対して送った書簡には、どのようなことが書かれてあるのか。こうした書簡を通じて、われわれは中世ヨーロッパの学生の日常生活を垣間見ることができるのである。著者の新刊『読むことの手帳―東大駒場連続講義―』（ロバート・キャンベル編、講談社選書メチエ、二〇〇四年）をあわせ読むと、興味の幅もひろがること請け合いだである。

関 哲行「巡礼と観光―「余暇社会学」序説」は、中世ヨーロッパ三大巡礼地（イエルサレム、ローマ、サンティアゴ）のひとつであったスペイン北西部のサンティアゴ（正確には、サンティアゴ・デ・コンポステーラ）への巡礼をとりあげ、巡礼のもつ意味を多角的に考察している。

「地の果て」への巡礼の前提となったものは何か。また、実際の巡礼はどのようにしてなされたのか。著者は、ヨーロッパ最初の本格的な観光案内書といわれる一二世紀の『サンティアゴ巡礼案内』や一五世紀末に著された『サンティアゴ巡礼記』、『スペイン、ポルトガル旅行記』を主史料として、サンティアゴ巡礼の実態をさぐっている。

中世ヨーロッパ世界にあつて、巡礼は信仰の旅であると同時に、余暇ないし観光という側面もあわせもつていた。著者は、ヨゼフ・ビーバーの余暇論や観光学を手がかりに、サンティアゴ巡礼を考察し、観光（余暇）としての巡礼という視点が中世ヨーロッパ世界においても成立することを実証している。コロンブスのアメリカ「発

見」は、サンティアゴのもつ「地の果て」のメタファーを消滅させることになった。聖地サンティアゴの聖性の剥奪は、それに付随する現象でもあつたという指摘は、刺激的ですらある。「地の果て」を見据えるスペイン史の大家の視線は、「地の果て」の彼方にまで及んでいる。

前川久美子「写本絵画の物語叙述とコンテキスト―斬新な聖人伝挿絵サイクルの成立をめぐる」は、写本絵画の物語叙述をとりあげ、その中心的課題であつた物語展開の表現あるいは時間の経過にともなう出来事の推移に関する表現について、中世の聖人伝挿絵をもとに考察している。とりわけ複数の場面を描き連ねた挿絵サイクルが伝承する聖人伝画像に焦点をあて、一三世紀半ばに成立する斬新な物語叙述を特徴づけ、あわせてそれを促した要因をさぐっている。

著者は斬新な物語叙述の現れる写本の例として、一二五五〜六〇年頃ロンドンで制作されたという『聖エドワード伝』のテキストを素材として用い、一三世紀半ばにおける聖人伝挿絵サイクルの成立事情を仔細に検討している。一二、一三世紀には現代人のものに近い時

間意識が現出するといわれているが、それが挿絵サイクルにおいて、新たな物語叙述を成立させる前提条件のひとつになったのではないかと推察している。

とかく美術史の分野でしか取り上げられてこなかった写本絵画を歴史的観点から読みとく手法は、近年注目を浴びている。本章を読みながら、写本絵画の物語の世界に知らず知らずのうちに引き込まれていく読者は、少なからず知的興奮を覚えるにちがいない。

.....

さて、本書全体をつらぬくモチーフは、以上にみてきたような文化的なものにとまらず、最近とみに関心が高まっている環境の問題にもおよんでいる。編者も述べているように、人間と環境の相互関係は、歴史学においても今後ますます注目される領域となるにちがいない。本書ではこうした視点に立つて、海、森、水(車)、災害といった自然環境を第一部で取り上げている。

有光秀行「中世アイリッシュ海風雲録」は、中世のあの時期にひとつの王国をなしていたマン島およびヘブリデーズ諸島の歴史を、マン島の最古の歴史叙述である

『マンと諸島の王たちの年代記』(成立は一二世紀)を史料に概観している。中世諸年代記を自家薬籠中のものとしている著者の筆はあくまでも慎重であり、年代記作者の叙述にどこまでも忠実である。

アイリッシュ海域の支配をめぐる争いもさることながら、流動的であると同時にある種のまとまりをもつていた「マンと諸島の王国」についていえば、その存在そのものがわれわれの目には奇異に映る。だが、考えてみれば、そもそも単一の「イギリス人」などというものは存在しないし、われわれが単一民族国家であると錯覚しがちな「イギリス」という国も、ことに今日では、ますます多民族・多宗教国家の様相を深めている。現代のイギリス社会が、「マルチ・レイシャル・ブリテン」であると同時に「マルチ・フェイス・ブリテン」と呼ばれている所以である。

また、同じ「イギリス」とはいえ、北ウエイルズ、スコットランド、アイルランドは、今日に至るまで「ケルト辺境」——この呼称の是非については、ここでは問わない——として、それぞれに固有の文化的伝統を維持してい

ることも、周知の事実である。

そうした見方からすれば、著者が末尾で紹介しているアンドルー・マクドナルドの言説、すなわち、マンの王たちにとっては、海路こそが彼らの多民族的「中核部分」を規定していたのであり、スコットランド、アイルランド、そしてイングランドは、彼らの「辺境」だったという見方は、たしかに意表を突くものだ。だが、翻つてみれば、それはわれわれ自身が、イングランド中心史観あるいは「連合王国」中心史観にあまりにもなれ親しんできたことの裏返しでもあるといえよう。その意味で、この論考は著者が鋏を入れた中世ブリテン諸島史の重要性を再認識させてくれる。

堀越宏一「水車は領主のものか？―ひとつの公共性の誕生」は、中世にあつてはエネルギーを生み出す唯一の原動機であつた水車をとり上げ、その発明と普及、開発や利用をめぐる問題を史実に即して、わかりやすく解説している。かのマルク・ブロックがうちたてた古典的な学説によれば、水車は領主の独占物であり、まさにそれゆえにその普及の障害となつたとされるが、はたしてそ

うだったのか。著者は、ブロックに導かれつつも、その学説に疑義を呈し、水車をめぐる「ひとつの公共性の誕生」を論じている。

手挽き臼と水車のバナリテの争いが最も激しかったのは、イングランドであつた。そこではフランスにみられたような城主支配領域が発達せず、バナリテは「ノルマン・コンケスト」を契機として大陸から輸入された制度のひとつに数えられている。それゆえに、水車の使用強制は中世イングランド農民の強い反発を招いたのである。

しかし、そうした歴史事実もさることながら、興味深いのはむしろ次のような指摘である。すなわち、水車の設置をめぐる領主の許認可権は、領主にア・プリオリに付属する特権ではなく、「ひとつの川に水車を建てたい多くの人びとの利害を調停する役割の表現だった」というものである。筆者はこの文言に接し、領主のもつている許認可権とは何か、領主権とは何か、といった問題をあらためて考えさせられた。

そもそも製粉水車は、食糧の効率的生産のために必要な施設であり、その意味ですでに公共的な存在であつた。

さらに水車小屋は、市場や教会などと同様、特別の「平和」が遵守されなければならない空間であり、ここに中世ヨーロッパにおける公共性の誕生をみることもできる。そして、上述のように、水車をめぐる領主の調停機能もまた、別の意味で水車にかかわる公共性のあらわれなのである、と筆者はいう。卓見というべきであろう。

甚野尚志「災害を前にした人間」は、最近関心が高まっている中世の災害史にメスを入れている。ドミニコ会やフランシスコ会の托鉢修道会士が民衆説教の手引書として作成した説教範例集は、従来、民衆教化を目的とした一種の文学的な著作とみなされてきた。そのため、そこで言及される自然災害も、現実とはかけ離れたものと受けとめられてきた。しかし、最近ではそうした説教範例集の例話から中世の災害についてのかなり正確な情報が得られることがわかってきたのである。

中世の人々は災害を何よりも「神の罰」とみなしたが、そうした理念を印象的に描いたものとして、著者は一三世紀のドミニコ会士ブルボンのエチエンヌによるグラニエ山の崩落事件をとりあげ、それについて詳説している。

さらに、一四世紀初頭に生じた大飢饉をとりあげてその実態を明らかにしたあと、この大飢饉に遭遇した当時の人びとがどのような対応をしたのか、具体例を挙げながら述べている。

自然災害に直面したときに、最も人々を救ったのは聖母マリアであつたという事実は、当時のマリア崇拜の浸透を物語るものとして興味深い。また、飢饉にさいして人々の飢餓を救ったのはなによりも修道院や教会による救貧事業（慈善行為）であり、それにともなつて都市などの公権力も大量の食糧輸入をおこなつていたという指摘も見のがしてはなるまい。ひとくちに災害史とはいっても、たんなる自然災害史ではないということを実感させられる論考である。

最後に、遠山茂樹「アルピオンの森林史話」は、中世に生きた人びとと森とのかかわりを、おもにインングランドを舞台に叙述している。中世インングランド諸王の排他的な猟場を構成していた御料林では、一般の法とは性質を異にする御料林法フオレスト・ローが施行され、独自の役人である御料林官がその管理・維持にあつてた。こうしたいわば

「制度としての森」は、いつ頃から存在し、中世イングランド社会においては、どのような意味をもっていたのか。換言すれば、御料林（制度）と人びとのかかわりは如何に、ということが大きなテーマとなっている。

現実の森であれ、想像界の森であれ、浮かび上がってくるその多面的な相貌は、森が中世世界において果たしていた役割の多大なることのあらわれである。

中世の森は、都市の大聖堂のなかにも深く入り込んでいた。シャトーブリアンが『キリスト教精髓』（一八〇二年）のなかでゴシックの大聖堂を森に譬えたのもむべなるかな、である。だが、歴史のなかの森はあまりに深く、筆者はいまだ研究のへ入口▽で右往左往している。

.....

以上、紹介した本書の内容は、けつして十全なものではない。むしろ、正直に告白すれば、個々の論考の豊かな本旨を十分に伝えることができなかつたのではないかと危惧している。各々の論考のあとにもうけられてい「羅針盤」には、それぞれのテーマに関連する基本的な参考文献があげられており、読者の便を図っている。ま

た、豊富な図版や写真も、読者の目を楽しませてくれると同時に、本文理解の一助となるであろう。

いずれにせよ、冒頭部分で述べたように、本書は幅広い読者層を射程内におさめた書物なので、学生はいうに及ばず、一般読者の方にも手にとっていただき、教科書風の「通史」では得られない新たな知見を発見していただければ、執筆者のひとりとしてこれにまさるようこびはない。

なお、本書は、読売新聞（二〇〇四年四月一八日付、全国版）の「書評」欄においてとりあげていただいたほか、毎日新聞（二〇〇四年三月一七日付、全国版）の「ブック・ウォッチング」のコーナーなどでもご紹介いただいた。記して感謝の意を表したい。

末筆ながら、本書を刊行してくださった東京大学出版会ならびに担当編集者の高木 宏氏に深謝の意を表しつつ、この拙い紹介を終えることにしよう。